

Title	晩年の南原繁
Author(s)	村松, 晋
Citation	聖学院大学論叢,18(3) : 346-339
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=90
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

晩年の南原繁

妻への挽歌が指し示す世界

村松 晋

1 問題の所在

南原繁（明治二十二年～昭和四十九年）は内村鑑三門下のキリスト者であるが、同信の友にして同じく東京大学総長をつとめた矢内原忠雄とは対照的に、信仰を言動の前面に押し出すことがなかった。「信仰」に限らず、彼は総じて「自己」というものを、直接的には語らなかつた。⁽¹⁾ そのためか従来の「南原論」には、彼をキリスト者として内側から把握しようとする観点が、いささか乏しい印象を受ける。⁽²⁾

しかしながら、南原の内面に迫る手立ては皆無というわけではない。「語らなかつた」南原は、己が真情を吐露する歌を、少なからず遺している。詠まれた状況を考慮しつつ、内在的に問い直すとき、語られなかつた領域は、おのずから立ち現れてくるはずである。

本稿はいまだ覚書の域を出ない小論ではあるものの、以上のような新しき視点に則って、南原が遺した歌、特に先立てる妻へ手向けた挽

歌に考察を加えようとするものである。南原にとって最晩年にあたる、この時期の歌に着目するのは、そこにキリスト者・南原の、最後の十年を支えた精神の営みが、如実に刻み込まれていると考えられるからである。

2 「亡き妻」の世界

『南原繁著作集』⁽³⁾は、処女作『国家と宗教』を巻頭に、以下、『フィヒテの政治哲学』、『政治理論史』といったアカデミックな書が続き、また『文化と国家』、『日本の理想』など、『戦後日本』の進路を問うた啓蒙的著作が名を連ねる。かくして十巻に及ぶ著作集の掉尾を飾るのは、しかし、『政治学』でも冷戦下の日本を質す時論でもない。南原が著作集最後の巻の最後の位置に置いたのは、『亡き妻』と題する随想だった。「随想」という言い方は、ある意味で当たらないかもしれない。南原はそこで一言も、己が「感情」を表す言葉を記していないからである。

その淡々とした筆致は事実の叙述という意味で、むしろ「記録」に近いと称しうる。実際、彼は最もつらい、妻の最期の場面さえ、次のように描写する。

十二月三十日。朝早くから他の者たちも集まったが、病人は長い間のたたかきも終ったかのごとく、酸素吸入器も取りはずされ、静かに呼吸しているのみであった。夜中ほとんど不眠で診てくれている和田担当手が朝九時ごろカンプル注射を施し、時計を見ながら脈を取っておられたが、ついに「九時十五分、ご臨終でございます」と、声は低くあったが、静かな朝の病室にひびいた。一同声なく、立ちつくし、私は、まだ温かい妻の手をとったまま、聖書を披いて読んだ。

「汝ら心に憂^{うれ}するなかれ、神を信じ、また吾を信すべし。わが父の家には住居^{すまい}多し。然らずば、かねてより汝らにこれを告ぐべきなり。我なんじのために処を備えにゆく。もし往きて我なんじのために処を備えば、また来たりて汝らを我に受くべし。わが居る処に汝らをも居らしめんとてなり」ヨハネ伝第十四章一―三

あとは立ち囲んだ家族たちの涙と嗚咽の黙禱。これが愛する者とのこの世の別離であったのである。

「涙と嗚咽」とはあるものの、事実を時系列で記すのみで、南原その人の感情をうかがわせる直接的な表現は、聖書の朗読箇所以外、極力抑えられている。それを「明治の男性」ゆえの「抑制」ないし「矜持」

と見ることは可能だろう。しかしこの抑えられた文体ゆえに、南原がその「涙と嗚咽」をも、「封印」しえたと考えるのは妥当でない。

実は「亡き妻」というこの短文は、「亡き妻」への挽歌によってしくくられている。そこでの南原は、右の「抑制」とは対照的な姿を示している。たとえばこんな歌がある。

老残の吾に涙の涸れずけり妻死にたりしその日おもへば
生き死には人の定めと知れれども妻死にたれば吾はさびし
母と妻と眠れる多磨^{いば}に庵^{いば}して嘆かばわれの心癒えむか

淡々とした記録風の文体とは一転、ここには妻に先立たれた一人の人間がさらけ出されている。「汝ら心に憂^{うれ}するなかれ、神を信じ、また吾を信すべし」と家族に言い聞かせた南原は、しかし、自身「信すべし」との声に応ずることで、即座に「涙と嗚咽」を封印しえたわけではなかった。「妻死にたりしその日おも」うとき、南原の「涙」は「涸れ」ることなく溢れ出た。こんな歌も目に入る。

三十八年はるかなるかも携へて妻とあり経し一生^{いせい}とぞおもふ
たづさへて飛驒高山や乗鞍にのぼりしことも思ほゆるかな
「携へて／たづさへて」という言葉が、繰り返して使われている。こ

こに明らかなのは南原にとり、妻とはいつも「たづさへて」ある存在だったということである。共に人生を歩み続けたということが、ことさらに印象づけられる存在だったということである。

しかも彼が妻と「たづさへて」のぼったのは、「飛驒高山や乗鞍」といった美しき山野だけではなかった。その「三十八年」が容易なら

ざる時であったということ、挽歌はこう語りかけている。

共に生きて三十八年わが世には苦しき戦ひの年がありき⁽⁷⁾

「わが世」に臨んだ「苦しき戦ひ」。これはいうまでもなく、「大東亜戦争」である。この「戦ひ」は南原にとり、「戦時下」の生活として、物質的な意味での「苦し」さを強いるものであったのは無論、当時『国家と宗教』所収の諸論文を通じ、祖国日本のありようを批判しつつも「民族は運命共同体といふ学説」を「身にしみ」て「諾」うていた⁽⁸⁾愛国者・南原に、心身を引き裂くとき、「苦し」みをもたらすものだった。南原は心身両面のかかる「戦ひ」を、妻と「共に生き」た。「共に」「戦」った。古希を過ぎて南原は、そうした妻と、突如、「この世の別離」を果たしたのだった。

時に昭和三十九年十二月三十日午前九時十五分、その最期のときを南原は「三十八年間」「たづさへて」「共に生き」た「まだ温かい妻の手」を、文字通り「たづさへて」迎えた。しかしその「手」は、かつて「飛騨高山や乗鞍」で「たづさへ」た「手」と違い、力なく、しかも「温か」さをやがて失う「手」であった。この二つの「手」の無残なまでの隔絶感、これこそ、「涸れ」「ぬ」「涙」の源だった。

しかしながら南原は、単に「涙」を流して終ったわけではなかった。南原は、「涙」の淵から立ち上がる自身の様も、三十一文字に込めていた。この点に関しては節をあらため、やはり挽歌に語らせる。

3 「亡友」^ととの対話

挽歌のなかに、次のような一首がある。

エホバとヘエホバ取りたまふ現身の人の命を何いはめやも⁽⁹⁾

この歌は、たとえば「生き死には人の定めと知れども妻死にたれば吾はさびし系」に込められた悲嘆と比べ、「生き死に」をめぐる人間的なとらわれからの決別として、画期的な自覚を示している。この転回は、いかにして成し遂げられたものなのか。実はここにはある友人との内なる対話がかかわっている。

かそかなるおのれ死なしめ絶対他者に在りて生きよと亡友のいへりき⁽¹⁰⁾

「絶対他者」という一語から鑑みて、この「亡友」^とが、「徹底他者論」に基づく独自の国家論および法哲学を展開した学者・三谷隆正（明治二十二年～昭和十九年）を指していることは明らかである。⁽¹¹⁾挽歌のなかで、唯一読み込まれてある友人は、三谷隆正ただ一人である。妻の急逝した当時、南原はこの「亡友」の全集を編纂する仕事に携わっていた。⁽¹²⁾その意味で南原は、職務上、三谷の作品をひもとく必要性に駆られていた。

南原同様、三谷もまた妻に先立たれた人だった。しかもその死別の様は、追想「家庭団欒」⁽¹³⁾が示唆するように、筆舌に尽くしがたい悲惨に彩られたものだった。

そもそも三谷の結婚生活は、わずか二年に満たぬものだった。しかも三谷は妻のみならず、生後間もないみどりこをも失っていた。さらに最も悲痛なことに、三谷は妻の最期を前にして、自身、終にたふれて臨終の妻をみとりすることができなかつた。三谷は「病褥に横臥のまゝ黙々として妻の棺を黙送した」のであつた。⁽¹⁴⁾

想像を絶する情景といわなければならぬ。三谷はこの悲慘のどん底で、「強ひて黙せば胸がはりさける」との思いから、「無茶苦茶に三十一文字を並べては枕頭の手帳に記した」。「いも逝きて十日を終なり朝まだきふと泪わきてとゞめあへざり」「君逝けど君のいましゝ室にありてもの言ひかはすまねしてみたり」。これらはその折詠まれた歌である。⁽¹⁵⁾

しかし注目すべきは疲弊しきつた三谷の実存ではない。三谷は、これほどの悲慘に見舞われながらも、再び起ち上がったのだつた。「君逝きてこの秋をなみだしげけれどさやけきひかり天にあふるる」「聖國にて君われを待てつちにあてわれきみを仰ぐちからあはせん」。⁽¹⁶⁾これらの歌が示唆するように、三谷は妻「のいましゝ室」につけた眼を、ついに「天」に向けるに至るのだつた。

地上生活に於けるさゝやかな謙遜なよろこび、パンひとつ、果物ひとつを分けあふ喜び。それは他の何物をも措いて求むべき不滅の宝ではないであらう。然しやさしく美しき喜びである。人生のさうしたつゝましき喜び、さゝやかな幸福、それは決して無意義なものではない。…家庭のうちこのちひさき喜びを

賞美することを、私も少しく学ばしていただいた。この些細な祝福のためだけでも敢へて冒して家庭生活に飛び込んだことは十分に意味のあることであつた。なぜなら結婚は私にとつては乾坤一擲の大冒険であつた。私が自分の一生の使命と信じて居る学問、それをさへ場合によつては妻子のために犠牲にしよう…そう覚悟して後初めて、私は敢へて一人の婦人を己が妻とすべく決意する事ができたのであつた。私はこの覚悟に充分報いられて居つた。家庭のうちなるつましき喜びに祝福あれ！⁽¹⁷⁾

三谷の眼から「泪」を拭い、そのまなざしを再び「天」に向けしめたのは何なのか。それはひとえに、恵みへの感謝であつた。しかしながらこの転回は、おのずから成し遂げられたものではない。ここには悲嘆の底で更新された、彼の自覚がかかつていた。

三谷は特に語っていないが、「臨終の妻をみとりすることができなかつたこと」「病褥に横臥のまゝ黙々として妻の棺を黙送」するしかなかったこと、これら悲劇の遠因を問うほどに、彼は己の罪の、込み入った根深さを、痛烈・深刻に自覚させられたはずである。三谷はここで呻吟することにより、贖罪という、この超越的恩恵を再確認させられたのだと思われる。「パンひとつ、果物ひとつを分けあふ喜び」「家庭のうちなるつましき喜び」、これら「さゝやかな」世界に無上の「祝福」を見出し、「充分報いられて居つた」と感謝を捧げうるまなざしは、どん底を経るなかで、「赦されし者」にのみ刻印される、稀有な「賜物」にほかならないからである。

南原は「家庭団欒」を収めた『三谷隆正全集』第二巻の後記において、この一文を評し、「畏敬の念と涙なくして読み得ない」と語った⁽¹⁸⁾。この「畏敬」という語から察するに、南原は、内村の徒たる一キリスト者として、三谷の再起における、その肅然たる内面的プロセスを読み取ったのだった。冒頭の一首「エホバとヘエホバ取りたまふ現身の人の命を何いはめやも」、ことにこの歌の末尾を飾る、その凜とした「反語」こそは、南原が死別という極限での自問の果てに、ついに意味付与の主体を、己を超えた「絶対他者」に委ねたこと、否、三谷同様、かくあらしめられたこと、まさに、「かそかなるおのれ」に「死」んで「絶対他者に在りて生」かしめられたことを証するものであるからである。

三谷は二年に満たぬ家庭生活を「団欒」と讃え、「私は：充分報いられて居つた」との感謝に覚醒することで再起した。悲嘆の底で喘ぎつつあった南原は、この「亡友」がたどりし様を跡づけつつ、「赦されし者」としての感謝の詞に唱和することで、再び起ち上がる契機を与えられたのである。

4 おわりに 晩年の南原を支えた自覚

妻亡き後の南原は、その生涯を閉じるまでの十年間、三谷をはじめとする「亡友」たちの全集編纂と、生徒・学生に向け、広く人生を問いかける講演活動に尽力した⁽¹⁹⁾。

傘寿に喩々とする南原にとり、全集編纂や講演は、決して楽な仕事ではなかつたはずである。しかしいずれも南原は、手を緩めることなくなし遂げた。その根底には「明治人」としての「律儀さ」以上に、晩年の南原を、根底から支え促すところの、強い使命感があつたと思われる。この使命感について、その内実をうかがわせる一首がある。

母としてなすべきことはし果てして逝きし妻かも永久に思はむ⁽²⁰⁾
南原はここで、妻の逝去を、各々に課せられた使命の観点から厳粛に受け止めている。妻は「母としてなすべきことはし果てし」たがゆえに、「エホバ」はその命を「取りたまふ」たのだ。南原はこう信ずることで、妻の死を受容したのである。

ところでこの一首を支えるまなざしは、生の意義を問ひなおすものであるだけに、「亡き妻」に向けられるのみならず、妻亡き後も生きてある南原に、おのずから自身の生を問わしめることになつたと思われる。すなわち「なすべきこと」があるゆえに、なお生かされてあるならば、その課せられし「なすべきこと」とは、自分にとつて何なのか。南原は晩年にさしかかりつつあることをおそらくは自覚しつつ、最後の職責を自問したと思われる。

時折しも南原の眼に、世界は危機的に映じてやまなかつた。曰く、米ソは「核戦争攻防の準備」にひた走り、ほかならぬ祖国日本は、「敗戦を境として、われわれが一旦誓つた精神的変革と自由の理念の後退、ないし退嬰」の様相を見せている⁽²¹⁾。

かかる時代の只中で自問する南原にとり、課せられた責務はただ一

つ、みずからの生を導いてきた信仰、ことに三谷ら「亡友」を育ててきた内村以来の信仰とその遺産とを、次代に向けて継承することだと痛感されたに相違ない。晩年の南原が高齢にもかかわらず、「亡友」らの作品を遺すべく尽力し、そして、次代を担う若者たちに、人生を問いかける場を持つと試みたのは、「亡き妻」の死を問うなかで練り上げられた、こうした使命感の表れであつたと思われる。

「母としてなすべきことはし果てして逝きし妻かも永久に思はむ」
 実は南原はこの歌を、「亡き妻」に捧げる挽歌の冒頭に置いている。この配置に込められた決意こそ、「亡き妻」の枕頭で読み上げた聖句「汝ら心に憂うるなかれ、神を信じ、また吾を信すべし」への応答にはかならない。思うに晩年の南原は、湧き上がる諸々の感情を、ただこの言葉に、この言葉にのみ収束することで、その生をまっとうしたのではなかつたか。

初めにも述べたように、南原は、とかく引き合いに出される矢内原とは異なつて、信仰に関して生涯、「寡黙」であつた。しかし、「亡き妻」に手向けられた一連の挽歌は、南原もまた、「主に依り恃む者」であつたことを如実に語りかけている。⁽²⁾

注

- (1) 丸山眞男「断想」(『回想の南原繁』、岩波書店、昭和五十年)等
 身近に接した人々の追想を参照。

(2) 南原繁への多様なアプローチを示した最近の興味深い作品として、『南原繁と現代』(南原繁研究会編著、tobe出版、二〇〇五年)がある。

(3) 『南原繁著作集』全十巻(岩波書店、昭和四十七、四十八年)。以下、南原の作品からの引用は『集』と略記、巻数・該当頁数のみ記す。

(4) 「亡き妻」、昭和四十年、『集』十、四一五頁

(5) 「挽歌」「亡き妻」の最後にまとめて記載。以下、南原の歌はことわりのない限り、全て「挽歌」所収。『集』十、四一六〜四一七頁

(6) 『集』十、四一六・四一八頁

(7) 『集』十、四一六頁

(8) 『形相』創元社、昭和二十三年、『集』六、三七三頁

(9) 『集』十、四一七頁

(10) 『集』十、四一七頁

(11) 三谷隆正については拙著『三谷隆正の研究 信仰・国家・歴史』(刀水書房、二〇〇一年)を参照。

(12) 『集』十、四一四頁

(13) 三谷隆正「家庭団欒」、昭和十年、『三谷隆正全集』第二巻、岩波書店、昭和四十年以下、『三谷』と略記

(14) 同、同右、『三谷』二〇四〜二〇五頁

(15) 同、同右(同右、二〇五〜二〇六頁)

- (16) 同、同右(同右、二〇七頁)
- (17) 同、同右(同右、二〇八頁)
- (18) 南原『三谷隆正全集』第二巻 後記(同右、四〇四頁)
- (19) 『歴史をつくるもの』(東大出版会、昭和四十四年)中、「私の学問・教育観」、「思い出の人々」と題された章に収められた文章・講演録参照(いずれも『集』十)
- (20) 『集』十、四一六頁
- (21) 「われらの歩んだ道」、昭和四十六年十月八日、香川県立三本松高等学校創立七十周年記念式典・記念講演会での講演(『集』十、二六二頁)
- (22) 『矢内原忠雄 信仰・学問・生涯』まえがき、岩波書店、昭和四十三年(『集』十、三三三頁)
- (23) 本稿は二〇〇五年一月二十八日、南原繁研究会での口頭発表をもとに、あらためて起稿したものである。つたない発表に対し親身なご助言をくださった研究会代表・鴨下重彦先生をはじめ、会員の皆様方に、この場を借りて心より御礼申し上げます。

参考文献

- 『南原繁著作集』全十巻(岩波書店、昭和四十七、四十八年)
- 南原繁研究会編著『南原繁と現代』(t o b e出版、二〇〇五年)

On Nanbara Shigeru in his last years

Focused on his elegy for his wife

Susumu MURAMATSU

The purpose of this study is to describe Nanbara's life as christian by analyzing his elegy for his wife.

Nanbara Shigeru is a Christian affected Kanzou Uchimura, but different and did not give faith of self with Tadao Yanaihara on the front. Therefore it is the present conditions that the study that paid its attention to his faith is not found for a conventional Nanbara study. Therefore, in this study, I tried that I described feelings as a Christian of Nanbara by paying its attention to the funeral march that I offered to the *tanka* that Nanbara of later years wrote, a particularly dead wife.

Key words: Nanbara Shigeru, Christianity, Elegy (tanka), Mitani Takamasa, Uchimura Kanzou